

御殿のインテリア

美しき威厳と機能



小粥祐子

⑤

住居内装 唐紙で心穏やかに

は天守にも使われていたようだ。

御殿で言うと、長野市松代町にある松代藩九代藩主・幸教が幕末期、義母のために建てた真田邸（松代城新御殿）も、柱間から張付天井に至るまで唐紙が貼られている。

江戸城本丸御殿大奥も、天井や、部屋の利用によつては柱間にも唐紙が貼られた。格式や威厳を持たねばならぬ江戸城本丸御殿の中に、連続文様の唐紙に包まれた軽やかな空間があったのだ。

コストと時間が抑えられるという実用性もさることながら、唐紙による内装は、障壁面に囲まれるよりも心穏やかに過ごせたに違いなし。そう感じるのは筆者だけではないはずだ。

（崇城大准教授）

〓毎週水曜日掲載

儀礼の場として、あるじ

の生活空間として、複数の

建物から成る御殿。その中

の儀式などに使われる公的

な部分（「表」）は柱間か

ら天井まで絵師が描いた極

彩色に包まれた空間だった。

では住居部分はどのような

内装だったのだろうか。

江戸城本丸御殿で見ると、表から住居部分である

「中奥」「大奥」へと進む

に連れ、天井が「鏡天井」

や「張付天井」と呼ばれる

平坦なものに変わる。これ

らの天井に貼られたのが唐

紙。花鳥風月や幾何学文様

など、さまざまな模様を木

版多色刷りした紙のことで

ある。

唐紙のデザインは地域に

よって違う。現在、よく知

られるのは「京」と「江戸」

の唐紙。特に京唐紙では、

江戸時代創業で今も摺り続

ける「唐長」（京都市）と

いう老舗がある。寺社など

歴史的建造物の貼り替えは

もちろん、ホテルや病院、

個人住宅といった多様な現

代建築の内装にも使われて

いる。

摺り方は独特だ。「ふる

い」と呼ばれるガーゼを貼

った円い木枠越しに板木に

色をのせ、その上に和紙を

置いて手で摺る。同じ文様

でも色を変えることで雰囲気

の異なる紙を何通りも作

ることができる。

唐紙が使われた建築とし

御殿のインテリア

美しき威厳と機能



小粥祐子 ⑥

唐紙多用した加賀・前田家

元日早々、能登半島を襲った大地震。被災状況を映像で見るたびに、「何かできないか」という焦燥感にさいなまれる。建物が倒壊している様は、建築を学ぶ者としても心が痛む。

現在の石川県的大部分は江戸時代には加賀藩領であった。加賀・前田家の居城といえは金沢城である。藩庁と藩主の住居は二の丸御殿にあった。文化7（1810）年に再建された二の丸御殿については近年調査が進み、内装用の「唐紙」の見本帳が見つかるなどいろいろと分かっている。

当たり前だが江戸時代にも地震や火災など幾多の自然災害や人災があった。堅牢なイメージがある城もその被害を

受けたが、御殿はほぼ優先的に再建されてきた。それは御殿が政庁であると同時に住居だったからにほかならない。工事は住居部分から始まり、政庁部分が建設途中でも住居部分が完成すれば藩主らは移り住んだ。一方の政庁は再建の際、一部省略されることすらあった。

金沢城二の丸御殿の「表」、つまり藩庁部分は、江戸城本丸御殿と同様に極彩色の障壁画が使われた。しかし、金沢城二の丸御殿の室内は、幕府の御殿とは少し違ったようだ。玄関や、江戸城でいえば大広間に相当する「竹の間」は障壁画で包まれていたが、藩主の住居である「御居間廻り」、側室や子どもたちの住居である「御広式」の室内は、

障壁画だけでなくさまざまな唐紙で飾られた。

唐紙の文様が部屋名を示すこともあった。例えば柳の模様を摺った唐紙を貼った部屋は「柳の間」と呼ばれたように。御居間廻りの「波の間」「舟の間」「桐の間」ではふすまに唐紙を貼り、ふすまより上の鴨居と天井の間の「小壁」と呼ばれる部分は赤土を塗っている。

前田家の御殿といえは13代当主・前田斉泰が継母真龍院（隆子）のために建てた「成巽閣」という建物が、前田家の庭園・兼六園内に今も現存する。1階は「表」に近い格式張った空間だが、2階には土壁を群青と朱で塗った「群青の間」という独特の空間が広がる。地震で一時閉園していた金沢城公園は開園、成巽閣も公開している。応援になればと願いつつ、久しぶりに訪ねてみようかと思う。

（崇城大准教授）
Ⅱ 毎週水曜日掲載

御殿のインテリア

美しき威厳と機能



小粥祐子 ⑦

畳の種類、敷き方にルール

テレビの時代劇のセットなどでは、殿様が居る場所が政庁であっても居室であっても部屋の間は同じように見える。だがこれまでお伝えした内装同様、畳も使われる場所によって種類から敷き方まで細かな違いがあった。

上段以外の床は基本的に同じ高さで、縁側や一部の入側（廊下）を除き、畳敷きだった。

敷き方にもルールがあった。江戸城本丸御殿の場合、儀礼や行事の際に使われた「表」と呼ばれる場所では、畳の長辺と床が平行になる形で敷き詰められた。また大名が將軍に拝謁するときの位置も家格で決まっていた。「この大名は敷居から何枚目の畳」といった形で示されるなど、畳は座席表の役割も果たした。これは幕府の御殿に限ったことではなく、各藩の国元の御殿や江戸の藩邸でも同じだった。

興味深いのは、江戸城本丸御殿の場合、將軍が日常を過ごす「中奥」の畳の方が、幕府の権威を示す空間である「表」よりも、高いランクの畳を使っていたことである。

複数の建物で構成される御殿は、建物ごとに一つの機能を持つように建てられ、それぞれの建物は複数の部屋からなっていた。建物の最も奥まった場所にある「上段」と呼ばれる一室は、格式を持たせるために床を一段高くし、部屋の正面には床と棚、その脇に付書院や帳台構（納戸構ともいう）がしつらえられた。

畳自体も、畳表は最高級の「献上表」に始まり「長

間表」「上表」のようにランク分けがなされ、畳縁も「大紋縁」「上近江布」「小紋縁」と織り方やデザ

例えば、將軍の寝室、あるいは居間として使われた「御小座敷」では献上表が用いられる一方、表にあたる大広間では將軍が出席する上・中・下段の各間は長間表、大名の席である二の間・三の間・四の間は上表より下のランクだった。

日常で人間の体が接する時間の最も長い畳は、権威より機能の方が優先されたということであろう。

（崇城大准教授）

毎週水曜日掲載

御殿のインテリア

美しき威厳と機能

小粥祐子 ⑧

現代に通じる 心地よさ追求

これまで御殿のインテリアを構成するものの一部―柱間を装飾した障壁画、天井の仕様、釘隠しに代表される鍔金物、ふすま紙や壁紙として使われた唐紙、床に敷き詰めた畳―を紹介してきた。

御殿は書院造と呼ばれる住宅様式で建てられた。室町時代末に生まれ、江戸時代初期に完成した様式である。御殿のインテリアは、つまり「書院造のインテリア」ともいえる。

御殿は、対面や儀式のための公的な建物群と日常生活のための私的な建物群からなった。インテリアも、公的な空間と私的な空間では意匠や雰囲気が異なっていた。

書院造は、現代の住宅、特に和室につながっているといわれる。江戸から明治、大正、昭和、平成、令和という時代の流れの中で、公的な空間で権威を示す装飾的な内装―絢爛豪華な障壁画など―は淘汰された。床、棚、

付書院、帳台構（納戸構ともいう）からなる座敷飾も、最も格式が高く実用性の低い帳台構は消えてしまった。一方で、畳や壁紙といった日常生活に必要な機能的なものは残っている。

江戸時代、將軍あるいは藩主やその正室、側室は、自分の居室をつくるときに「御好」といって、自分の要望を伝えるこ

とができた。例えば江戸城本丸御殿では、女性が使った大奥の部屋には、「源氏物語」のような女性が登場する物語絵を描いた障壁画や、桃や桜の花、ヒノキの

薄い板を重ねて作る檜扇など、いかにも女性の柔らかさをイメージさせる鍔金物が選ばれた。筆者自身が御殿について勉強をし始めたころは、二条城二の丸御殿や江戸城本丸御殿に代表される將軍家の御殿に関する情報が圧倒的に多かった。しかし近年、佐賀城本丸御殿や熊本城本丸御殿などが復元されるなど、各地の大名の御殿に関する情報が増えてきた。

連載でも触れたように、金沢城二の丸御殿は復元計画が進む中で、新たな史料が次々に見つかっている。柱間の装飾の在り方や色使いなど、將軍家のものとは違う御殿の姿が浮かび上がってきている。

御殿のインテリアは、あるじのアイデンティティーの表れとすることなのであろう。現代の私たちが部屋を心地よいようにしつらえるのと同じように。

（崇城大准教授）

〓 終わり